

平成20年度教員個人評価報告書

佐賀大学農学部

1. 個人評価の実施状況

(1) 対象教員数，個人評価実施者数，回収率など

対象教員数 (個人評価実施者数)	個人評価回収者数	回収率
51人	47人	92.1%

<注>

平成20年度個人評価は，平成20年4月1日現在の在職者53人から平成21年3月退職者5人を除いた48人と，平成20年度中途に採用された3人の合計51人について行い，47人から回答を得た。回収率は92.1%であった。

(2) 教員個人評価の実施概要

1) 評価組織（農学部評価委員会）の構成

学部長	野瀬昭博
副学部長	近藤榮造
副学部長	光富勝
学部長指名	藤田修二
学部長指名	大島一里
学部長指名	内田進
大学評価委員	半田駿
大学評価委員	井上興一
応用生物科学科長	松本亮司
生物環境科学科長	白武義治
生命機能科学科長	渡邊啓一
附属資源循環フィールド科学教育研究センター長	尾野喜孝
事務長	宮川洋

2) 実施内容，方法

佐賀大学農学部における教員の個人評価に関する実施基準及び農学部教員個人評価実施要項に基づき，平成20年度の活動実績について，4領域（教育，研究，国際交流・社会貢献，組織運営）の個人評価を行った。（「農学部教員個人評価実施要項」参照）

<個人評価の経緯等>

- ① 平成21年9月17日（木）に学部長が対象教員に個人評価関係書類を配布し，平成21年10月23日（金）までに学科長又はフィールドセンター長に提出するよう依頼した。

- ② 提出された関係書類（別紙様式1～3）について、各教員の活動実績を熟知している学科長、フィールドセンター長が中心となって、審査を開始した（平成21年11月）。
- ③ 上記審査に併行して学部評価委員会を開催（平成21年11月26日、平成22年4月28日）し、問題点等を検討した。対象教員51人全員の個人評価を行った結果、各教員による自己点検・評価の結果は、一部を除いて、概ね妥当と判断した。
- ④ 学部長から、対象教員に対し、個人評価結果を通知した。その際、評価結果に対して不服がある場合は、1週間以内に不服申立書（様式任意）を学部長まで提出するよう付記した（平成22年5月12日）。
- ⑤ 不服申立書を提出した教員はいなかった。

[添付資料]

- ① 佐賀大学農学部における教員の個人評価に関する実施基準
- ② 農学部教員個人評価実施基準
- ③ 農学部個人評価基準
- ④ 平成20年度個人目標申告書（別紙様式1）
- ⑤ 平成20年度個人目標申告書（別紙様式1の記入例）
- ⑥ 平成19年度活動実績報告書（別紙様式2）
- ⑦ 平成19年度自己点検・評価書及び個人評価結果（別紙様式3、4）
- ⑧ 農学部個人評価基準に基づく自己評価結果（別紙様式3の別表）
- ⑨ 個人評価結果の書き方について

2. 評価領域別の集計・分析と自己点検評価

(1) 教育の領域

1) 評価項目ごとの実績集計と分析

<授業担当>

担当科目数	教員数		
	全学教育	専門	大学院
2以下	21	6	24
3～5	7	10	14
6以上	0	31	2

- ① 全学教育科目は、ほぼ全ての教員が担当しているが、隔年担当の教員がいることから、今年度担当者数は5割強の28人である。ほとんどが1教科の担当である。
- ② 専門科目は、全ての教員が担当しており、60%の教員が6科目以上を担当している。また、10科目以上担当している教員は9人もおり、担当科目の増加傾向は年々大きくなっている。
- ③ 大学院科目（修士課程）は、助教や一部の講師以上の教員を除き、ほぼ全ての教員が担当しており、大学院担当教員のうち、前年度は66%の教員が3科目以上を受け持っていたが、今年度は40%と減少している。

<学生指導>

指導学生数	教 員 数	
	学部	修士
2以下	21	22
3～5	23	6
6以上	3	2

- ④ 指導学生数（卒論生）では、教員1人当たりの学部生2人以下が21人で、3人以上が26人いる。教員1人当たり、どの程度の指導学生数が適切かは、研究室によって事情が異なるので一概には言えない。
- ⑤ 大学院の指導学生数は、主指導を担当している数を示している。修士学生数2以下の教員のうち、学生を指導していない教員は10人である。

<FD活動及び教育改善等>

教育改善内容	教 員 数
FD研修等参加	22
授業の改善など	20
TAの活用	35

- ⑥ FD活動などに参加した教員は、前年度は31人であったが、今年度は22人と減少している。また、FD研修に参加する教員が定着傾向にあり、多くの教員がFD研修に参加するよう働きかける必要がある。
- ⑦ 昨年度は、授業やシラバスの改善に取り組む教員は15人であったが、今年度は20人とやや増加した。TAの活用は、例年通り7割を超える教員が行っている。

<学生の生活指導等>

学生の生活指導時間など	教 員 数
オフィスアワー	8
オフィスアワー以外	15
サークル顧問	8

- ⑧ 学生の生活指導面では、オフィスアワーを活用した教員より、昨年度と同様にオフィスアワー以外に生活指導を行った教員が多く、オフィスアワーを設けた意義が薄れている。サークル顧問の数は、10人から8人となっている。

2) 教育の領域における教員の活動評価集計と分析

教育の領域における重み付けは、94%の教員が0.3以上で、0.2を付けた教員は3人のみであり、達成率も80%以上とした教員が74%あった。また、達成率を60%未満とした教員は一人もいなかった。

したがって、例年同様、農学部の教員は教育に重点をおき、その達成率も高いことが明らかである。

3) 教育の領域における自己点検評価

ほとんどの教員が本領域に高い重み付けを行ったのは、教育先導大学である佐賀大学教員としての自覚の現れであり、それなりに評価できる。一方、教員のFD活動や授業の改善については、最近、特定の教員が行う傾向にあり、農学部の全教員が継続的に取り組むよう、働きかける必要がある。

(2) 研究の領域

1) 評価項目ごとの実績集計と分析 (数値は、件数を示す)

<著書・論文及び講演発表など>

事 項	数	事 項	数
著 書	13	一般講演	111
論 文	73	技術・品種の創出	4
総 説	16	辞書などの編纂, データベース作成	0
資料・解説・論説など	36	受賞 (学外)	4
招待講演・特別講演	29	知的財産権の出願等 (著作権は除く)	16

- ① 今年度は、教員一人当たり査読付き論文を約1.6本、発表では約2.4件と前年度と、同様に高い研究活動を維持している。
- ② 招待あるいは特別講演数は、29件あり、特許出願数も16件と前年度の倍となっていることから、多くの教員が質の高い研究を行っている。

<科研費申請 (研究代表者) >

科研費申請件数	教員数
1件	37
2件以上	2

- ③ 平成20年度に申請した人数は39人 (41件) であり、その中での継続を含めた採択率 (平成21年度) は54% (22件) と申請件数の過半数が採択されている。ただ、農学部全教員からみた申請率は75%であり、去年の60%より申請人数が増加しているが、さらに申請率を高めるよう働きかける必要がある。

<外部資金導入>

外部資金の導入件数	教員数
1～2	18
3～5	7
6件以上	0

- ④ 科研費を含めた外部資金の獲得者数は昨年度とほぼ同じ25人であり、去年より人数はやや減少したものの、53%の教員が外部資金を獲得している。

2) 研究の領域における教員の活動評価集計と分析

研究領域において、0.3以上の重み付けをした教員は89%であり、0.5をつけ

た教員が18%もいた。このことから、農学部には研究意欲が非常に高い教員が多くいることを示している。

達成率60%の教員は94%であり、また達成率を90%以上とした教員は37%もいた。農学部全体として、論文数や講演発表数等が多く、科研費の高い採択率などを考慮すると、多くの教員の達成率が高いことは納得でき、農学部教員の研究活動は非常に活発であることが分かる。

3) 研究の領域における自己点検評価

多くの農学部教員が本領域に高い重み付けを行ったのは、前年度と同様に研究意欲の高さを示すものであり、優れた研究活動実績とともに高く評価できる。

教員の定員が削減される中で、今後もこのような高い研究活動を維持するには、教員が研究に専念できる教育研究環境の整備が必要であると思われる。

(3) 国際・社会貢献の領域

1) 評価項目ごとの実績集計と分析 (数値は教員数を示す)

<国際貢献>

件数	活動実績	留学生	研究者受入れ
1	9	8	4
2	1	5	1
3	2	3	1
4	1	0	0
5	0	0	1
6以上	0	0	0

① 活動実績は、各教員の留学・海外研修件数、国際学会発表件数及びJICAなどの国際協力件数の合計を示す。今年度は、昨年度に比べて国際活動を行った教員や留学生を受け入れた教員の数が減少した。

② 研究者の受け入れ教員数は、前年度と同様である。

<社会貢献>

件数	学会役員等	審議会委員	地域貢献 (講演・技術指導等)	ジョイント セミナー
1	4	8	15	20
2	7	2	3	4
3	4	0	3	3
4	4	1	1	1
5	3	1	0	0
6以上	2	2	1	0

③ 約半数の教員が何らかの学・協会の役員を引き受けており、地方公共団体の審議会委員にも14人の教員が就任している。

④ 地域での講演会や教育集会に参加した教員は、全体の47%で、昨年度と同様

にほぼ半数の教員が地域貢献に関わっている。

- ⑤ ジョイントセミナーにも51%の教員が参加し、例年と同様、高校の講師派遣要請に積極的に協力している。

2) 国際・社会貢献の領域における教員の活動評価集計と分析

国際・社会貢献の領域に関する重み付けは、94%の教員が0.1と0.2で、ほとんどの教員が目標達成率を60%以上としている。一方、目標達成率を50%未満とする教員が4人いた。

この領域における活動は、国際貢献が去年よりやや低い結果となったが、全体として、例年通り高い活動を維持しており、教員の国際交流や地域貢献に対する積極的な姿勢が認められる。

3) 国際・社会貢献の領域における自己点検評価

農学部多くの教員が高度な国際・社会貢献を行っており、達成率も高く評価する教員が多くいた。反面、達成率を50%未満とする教員が4人いたが、年齢の関係あるいは各教員の専門領域における国外あるいは地域のニーズなどが年度毎に異なることもあり、この領域における評価は個人差があるのは当然と判断される。

今後、農学部全体として、ますますこの領域の貢献度を高めて行く必要がある。

(4) 組織運営の領域

1) 評価項目ごとの実績集計と分析

<組織運営の活動実績>

参加委員会数	教員数
1	3
2	7
3	5
4	5
5	2
6以上	11

7割を超す教員が何らかの形で全学あるいは農学部の委員会に参加している。

6以上の委員会に参加している教員が11人いるが、その中で8以上参加している教員が8人もいる。開催頻度数など委員会の性質にもよるが、時間的な面から教員本来の教育研究に支障をきたしている可能性がある。委員会に参加していない教員が2割以上いる現状を考慮すると、組織運営をより効率的にすると同時に委員の選出方法を工夫して、多数の委員会に参加している教員の負担を減らす必要がある。

2) 組織運営の領域における教員の活動評価集計と分析

この領域に対する重みは、86%の教員が0.1と0.2であり、達成率を60%以上と評価する教員は92%であった。大部分の教員は、組織運営には活動の重点を

置いてはいないが、与えられた仕事は確実にを行っていることを意味している。

3) 組織運営の領域における自己点検評価

大部分の教員が本領域に低い重み付けをしているが、参加した委員会で着実に任務をこなしていると判断される。

6つ以上の委員会に参加している教員が11人いて、14もの委員会に関与している教員が2人いた。多数の委員会に参加し、そこで活躍することにより組織運営に大きく貢献をしている教員には高い評価を与えなければならないが、同時に教育研究が手薄になる可能性がある。委員の選出法の工夫、組織運営の高度化、効率化、集中化等を検討する必要があると考えられる。

3. 教員の総合的活動状況評価の集計・分析と自己点検評価

1) 総合評価の集計・分析と自己点検評価

<総合評価>

総合評価	総合評価点	実績評価点範囲	教員数
特に優れている	5	4.0～	19
優れている	4	3.5～3.9	15
おおむね良好	3	3.0～3.4	13
改善の余地がある	2	2.5～2.9	2
改善を要する	1	～2.4	0

<達成努力評価>

達成努力評価点範囲	教員数
90～	6
80～89	24
60～79	18
50～59	1
～49	0

- ① 総合評価については、70%の教員が「特に優れている」または「優れている」であり、これらに「おおむね良好」を加えると、96%にのぼる。したがって、平成20年度の教員の総合的活動状況は例年通り高く評価できる。
- ② 2人（4%）の教員が「改善の余地がある」と総合評価しており、去年より1人増加した。しかし、これらの教員の活動実績の内容については十分に高く評価できるものであり、本人らの自己に対する厳しい姿勢が原因である。したがって、農学部評価委員会はこれらの教員に対する改善のための指導等の必要性はないものと判断した。
- ③ 達成努力評価点では、教員の65%が80点以上の評価であり、98%の教員が60点以上の評価をしている。ここ最近、努力評価点を高く申告する教員が漸次増加してきている。このことは、自分らの優れた活動実績を正当に評価

する教員が増えてきたことを示しているが、実績が優れているのに自らを低く評価する比較的厳しい姿勢を持つ教員も多くいる。